

予算確保で課題指摘

学術会議委
論点まとめ
科学的意義は評価



【東京支社】日本学術会

議が設置した国際リニアコ
ライダー(ILC)計画の
見直し案に関する検討委員
会と技術検証分科会は18
日、都内で合同の第5回会
合を開き、論点をまとめた。
予算確保の方策が明らかで
ない点や安全面など技術的
課題について厳しい指摘が
相次いだ。科学的意義につ
いては一定の評価をした。

検討委員8人、分科会委
員5人が出席。検討委の家
泰弘委員長(日本学術振興
会理事)が論点について説

明した。

加速を終えた電子、陽電
子ビームのエネルギーを吸
収する機器などに関し、実
現可能性や事故時の対応に
疑問が出た。巨額の経費に
ついては「適正な(国際)

分担の見通しなしに日本が
誘致を決定すべきでない」
とし、経済波及効果は「根
拠に乏しい数字が地元で過
剰な期待を抱かせている」
と指摘した。

一方、科学的意義に関し
てはILCの加速器短縮計
画について「欧州合同原子
核研究所(CERN、スイ
ス)の実験結果を踏まえ、
研究目標をヒッグス結合の

精密測定に絞ったことは妥
当と一定の評価を示した。
会合後、家委員長は「現
段階では厳しめになってい
るが、(実現に向け)ある
程度クリアされることが必
要だと思う。ヒアリングを
行いながら最終回答への作
業を続けたい」と語った。

検討委は次回会合を10月
1日、分科会は同2日に開
催する。